

七時半の電話

十年程前、母が他界した。癌だった母の看病を父がひとりで一生懸命やってくれた。実家は埼玉県東松山市、姉は実家から車で30分位の所に住んでいたが、お店がある。私は杉並に住んでいて姑も居るし、思うように行けなかった。

父は、「心配するな、自分がやる」そう言ってくれた。その頃から、頻繁に父に電話をかけるようになった。

当時は、母の様子はもちろん、父自身の事も気になって、かけていたような気がする。

母が亡くなるまで夢中で過ごした、4ヶ月だった。

お葬式も終わり、父の今後を話し合った。父が70歳になった頃だった。姉の所に行くのが一番安心と思ったが、地元にとけ込み、老人会や、ゲートボール等のサークル活動も活発にやっていた父は、地元を離れる事は出来なかった。

父は健康だったが、母を見送った脱力感は計り知れない。妻に先立たれるとは思っていなかったようだ。

娘の私に出来る事は、電話でそれとなく励ますくらいだった。姉と連携して、私が電話をし、何か変わった事があったら、都合の付く時間に姉が様子を見に行くという事になった。

家の事は、ある程度出来るようだったが、日々の生活や、食事など続けていけるのだろうか、どれだけの期間頑張れるだろうか、様子が知りたかった。それで電話をかけることにして、かける時間を決めた。夜七時半頃がお互いに良さそうなので、その頃を見計らってかけるようにした。

他愛のない話し、

私：「今日は何をしたの？」

父：「えーと…何をしたかな??」

私：「夕飯はちゃんと食べた？」

父：「ああ、食べた」あまり元気がない。

私：「何を、食べたの？」

父：「何を?…」

私：「しっかりして!」「大丈夫?」

私：「明日も電話するから」

こんな状態で大丈夫だろうか?心配な毎日がしばらく続いた。

今日、何をしたか、何を食べたか、すぐに思い出せないなんて…。ぼけてしまったら独りで生活は出来ない。

不安と焦り、でも私は月に一度ぐらいしか様子を見に行けない。

父のところへ行く時は、魚を煮たり、父の好物を作って持っていった。姉も、私も、実家にいる数時間で、日ごろ行き届かない掃除をしたり、衣替えを手伝ったり、食料を冷凍しておく智恵などを父に教えた。父を励ます気持ちだったように記憶している。

母は、生前、俳句の会に入っていて、たくさんの俳句を遺していた。父と相談して、それをまとめることにした。父の張り合いにもなるだろうと思った、父は、俳句の先生にも手伝ってもらいながら、表装、製本、全て手作りの立派な遺句集をつくってくれた。49日の法要に親戚や俳句の友人にまで作ったのだから、30冊以上作った事になる。つらかったかもしれないけど、父に感謝している。

父の性格から同居は無理。でも、何とか元気を取り戻して欲しい。祈るような気持ちで電話をかけた。

「七時半の電話」を初めて、半年ぐらい経ったころ、父の電話の前のカレンダーには、予定がたくさん書き込まれるようになってきた。

老人会やゲートボールの仲間の人達にも励まされたのだろうか、私との話題作りのためだろうか、出て行く事が多くなってきたようだ。

「七時半の電話」も生活の一部になってきたみたいだった。間近になると、一日の事を思い出し、私の質問に答えようとしているのか、すぐに答えが返ってくるようになった。カレンダーを見ながら話しているみたいだ。父のしぐさが受話器を通して感じる。

料理の失敗談、調理法、保存法とか、生活の細々したことで、私に聞きたい事をメモに書いていた時もあった。

話の途中に、お風呂の沸いた事を知らせるタイマーの音が聞こえる。

私：「これからお風呂？」

父：「ああ、聞こえるかい？」

私：「風邪をひかないようにね」

父：「ありがとう、電話の前に夕食の片付けを済ましておいたから、後はお風呂に入って寝るだけだ」

私の電話を待っていたのだ！

また、ある日、声がいつもと違う。どうしたのかと、聞いたら、コタツで“うたた寝”をしてしまったと言う。お風呂の火を止めてくる、ちょうどよい温度になっているはずと、私の電話を区切りになっている様子がかがえた。お風呂で寝ないようにと、冗談を言った時もある。

もう一度、八時半頃電話した方が良いかと聞いたら、「大丈夫、大丈夫」って、笑っていた。

後日談だが、近所の人や姉が夕食に誘っても、「娘から電話があるから、七時半には帰らない」と言って、急いで帰ってしまうと、聞いた。

風邪声の時は、姉に電話をして、様子を見に行ってもらう。

寝込んでいる時は、姉が、洗濯、食事の支度、買物をして置いてくる。

留守だった時もあったらしい。カレンダーを確認して、出先は分かり、姉から報告が来る。

大した事はなかったのだろう。

夜、電話すると、「(姉)が来てくれた、助かった」とか、「手紙が置いてあったよ」とか。

時には、電話をかけても出ない、どうしたのだろう……。

10分後にまたかける。居ない。また10分後にかける。出た。「どうしたの」と、聞くと、台所で、夕食の後片付けに手間取り、電話の音が聞こえなかったとか、戸締りをしていて、聞こえなかったとか……

「昼間忙しくて、手順が狂った、心配掛けたね ゴメンゴメン」と、元気そうな声。

母の一周忌が終わったころだったろうか。旅行に行って来るから、電話はしなくていいと言う事も多くなってきた。

お風呂に電話を持ち込んで「明日は、旅行だから、早く寝るよ、お風呂に入っているの分かるかい？」と、こもった声に、チャポチャポと、水の音をさせた。

良かった！ 元気になってきた。

ボランティアにも、積極的に参加しているらしい、喜ばれたよと、自慢気な声。忙しそうにしている。明日の準備や、数日後の準備やらで、電話に出ても、あわただしい。「七時半の電話」は必要なくなったかもしれない。

でも、独りで暮らしている限り、かけ続けるつもりだった。 安否確認！

7年程たった頃、父の孫にあたり養子でもある姉の息子夫婦が別棟に住む事になった。

お風呂は一緒だから、安否確認の電話は必要ない。

私の役目は終わったかに思えたので、父に聞いた。答えは、「かけて欲しい」。即答だった。

私はその時、気がついた、「七時半の電話」が父にとって必要不可欠になっていたのだという事が。

私の方がおっくうがっている。 父はますます年をとってゆくのだから、「七時半の電話」は必要なものだったのだ。受話器から聞こえる父の感謝の声「ありがとう、元気だよ」。今でも、思い出せる。

「七時半の電話」から7年半後、父は胃の具合が悪く入院、手術となった。少し良くなると、電話のある病室を選んで、私の電話を待っていた。

一ヶ月後退院。「ありがとう、元気にしているから、大丈夫だ」

本当に大丈夫なのだろうか、私に心配かけまいとしているようだった。実は父は胃癌に冒されていて、医者からは余命1年半と言われていたのだった。(事実は父には言えなかった)

その頃私は、姑を自宅介護(3年間)の後、自宅で、夫と二人で姑の最期を看取り、その後3ヶ月もたらずに夫の突然死。

続けざまに不幸に見舞われた。

手術後の父に反対に励まされていたのだ。

父：「大丈夫か？」

私：「ありがとう、私は元気よ、大丈夫、お父さんは」

父：「ああ、元気だ」

お互い元気だと言っているが、“から元気”なのは、わかっていた。

思いのほか頑固だったので、父は自分の思い通りに過ごしていた。

ボランティア活動を止めさせ入院するようにすすめる私達の言葉に耳をかさなかった。電話は相変わらず、「ありがとう、元気だよ」が続いた。

余命一年半と言われたが、二年になっていた。

その頃から父は、「調子はあまり良くないが、元気であるから、ありがとう」そんな言葉に変わってきた。

痛みもあるらしい。痩せてきている。

姉や甥夫婦とも相談をし、何とか入院させようと、思った矢先自分から入院を言い出した。

痛みにたえられなくなったようだ。

私には、「検査入院だから心配するな」と言っていた。

自分ではどう思っていたのか、覚悟の入院だったのか私には分かりません。

そして一ヶ月、父は帰らぬ人となった。10年間の「七時半の電話」は終わった。

最後の一年間、民生委員だった私は「電話訪問」を行っていたが、電話訪問の相手は父と同じ位の年頃の人達。

私からの電話を待っている。「誰かが、気にかけてくれる、それが嬉しい」と、言って感謝の涙を流す人が居る。私まで涙声になってしまう。父と重なってしまうからだ。相手の顔は見えないけど、様子や人柄は見えてくる。たった一本の電話でも、大きな力がある事を実感していた。

要は、生きていくかどうかの安否確認の電話だが、その1本の電話を楽しみにして、相手が明るく生きていけるようになるものだと思った。毎日かけつづけることで、相手のそういう変化を感じ取る事ができたのは、継続の力だと思う。いろいろな話も聞かせてもらった。

私でも毎日の1本の電話でこれだけの事が出来たことが嬉しかった。これからヘルパーをやっていくのに大切な宝になっている。今は天国で母と一緒にいるだろう父に、ほんとうに感謝したい。私にとっても「七時半の電話」は支えだった。「お父さん、ありがとう」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

安否確認 = 姉と私が相談をして、孤独死だけは避けたいとの考えから思いついた、毎日の電話
生きていくかどうかの確認のつもりの電話だった。

電話訪問 = 杉並区でやっていた、65歳以上の独り住まい、老々世帯への安否確認の電話

著者のプロフィール (ペンネーム 澤谷 みどり) メールアドレス risui@jcom.home.ne.jp
昭和24年 埼玉県生まれ 平成7年より社会福祉の仕事始める ヘルパー 2級取得
ヘルパー講習を受けた際、同期生であった NPO 介護と福祉の会 鳩竹林(ぼぼちくりん)代
表者

とは、ご近所付き合いの間柄。その縁で ぼぼちくりん通信第3号に 平成11年に亡くなられた父との交流を綴った短編エッセイを掲載した。これを再校正したものを、知の市庭 に寄稿

平成 3年 5月 埼玉の実母 他界(行年 67歳)

平成 7年 10月 同居の姑 病状思わしくなくベッド生活

平成 9年 9月 埼玉の実父 手術

平成 10年 10月 同居の姑 他界(行年 85歳)

平成 11年 1月 夫他界(行年 58歳)

平成 11年 11月 実父他界(行年 77歳)

平成 12年より自宅介護の経験を生かして元気にヘルパーとして自立現在に至る

